
persona ~ return ~

kumap

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

persona\return\

【Nコード】

N0133Q

【作者名】

kumap

【あらすじ】

ペルソナシリーズ全般のキャラつかっちゃいます。

ペルソナファンの皆様完璧なキャラ崩壊ありますので、
いっやっていう人はお逃げ下さい（笑）

あ、あらすじはないのであしからず

登場人物

主な登場人物 1

主人公

里中 大志

perusonaイザナギ、その他

ある日白の部屋に投げ込まれたところを麻衣たちに発見された。

同じく主人公

加藤 麻衣

perusonaイザナミ、その他

その他

斉藤 美久

perusonaキクリヒメ、その他

伊藤 和馬

perusonaヨモツシコメ、その他

神取 鷹久

perusona?

周防達也

perusonaアポロ

舞耶

perusonaアルテミス

白

——闇・・・

そこは白い闇だった。

そこには自分と”何か”がいた

——>汝・・・・・・は・・・・・・呼べ

——・・・また？またこの夢・・・違

違ったいつも見ているものとは違う

・・・意識が遠のいてゆく・・・

「・・・い・・・まい・・・まい！」

びくつと飛び起きようとしたら思いっきり頭をぶつけた

「いたっ」

頭を抱えた

（ええつと何してたっけ）

「麻衣起きた？」

（そうだ私は自分の家の部屋で寝てたんだ）

だが、おかしかった。

（あれ？でもわたし二段ベットだったっけ？）

「麻衣！！！」

誰かが怒鳴り、はつと我に返った

「・・・美久？」

「よかったーやっと起きたよ」

美久は胸に手を当ててほつとしたように言った

「ここ何処？」

「分からない起きたらここにいたの」

ベットらしき所から降り自分の格好を見たら病院の患者が着ているような服だった。

周りを見るとベットと段ボールがいくつもあるだけだった、壁は白

く床はふかふかした絨毯だった、・・・ドアがない

「あれっドアが無いよ」

「うん、そうなの、あ、その段ボールに麻衣の荷物があるよ」

「え、」

段ボールを開けると自分の荷物があった

その突如

「きゃあああああ」

影

「きやあああああ」

突如美久の悲鳴が聞こえ振り向くとそこには異形の物体があった。
髪の毛だけでその上にはティアラがある。

「美しく」

——> 応えよ、

——えっ

——> 我声に応えよ

——この、声夢の、中の、うっ

——> 呼べ、我名を、我名は

その時目の前にランプと大きさが同じカードが出てきた

「ペ・・・ル・・・ソ・・・ナ」

その時無意識に”何”かの名前を言っていた

「誘う者イザナミ！」

無意識でカードを潰した

< 我は汝、汝は我、我心の海よりいでし者、誘う者、伊邪那美なり >

私はそこで気絶した。

「・・・ガル・・・」

気絶したままの私の口が動く

美久がビクリしたように言った

「麻衣？どうしたの？」

その突如

<< シュピー >>

音をあげて風が”何か”の下から風が来て先が鋭い剣のように刺さ
った、そして消えた

「麻衣っ」

「う、ん？」

「よかつたゝいきてるよゝ」

「何がおきつ・・・！」

「どうしつ・・・！」

そこから真っ暗になってまた明るくなった。

<< シュウウ >>

音がした方を見ると

トビラがあった

2人

ドアが開いたとたん

<<ドサツ>>

2人の男子が放り出された

「えっ何？」

美久が声をあげ

「う、そ．．．．．大志君？」

そのうちの一人は両思いの恋人、里中 大志だった

「和馬っ」

美久が大声を出し駆け寄った、私もそれに続いた

——．．．．．なん、だ．．．誰かが呼んでる？

——>．．．が．．．．．を取れ

——なんだっ．．．うっ

「．．．．．くんっ、．．．しくんっ．．．．．大志君っ」

「っ！」

「おき．．．た？」

「ここは．．．」

「よかったぐすっ、生きてるようっ、ぐすっ、ひっく、えっぐ」

麻衣は泣き始めた

「．．．俺は何をしていたんだ？」

——ケサナイデ

「うっなんだっ」

大志は口を押さえた．．．気持ち悪い

――ケサナイデ

「どうしたのっ、っうっ」

――ケサナイデ

ほかの2人には聴こえない<コエ>

――記憶ケサナイデ

――コノ声届イタ

その<コエ>はほっとしたかのように言った

――コノ力<ペルソナ>>ノ力貸ス

大志は悟ったどこかで聞いた<コエ>だった

「この声っ夢の中で」

「わた、しも」

――ソコノ2人モ、ジキニ目覚メル、マタネ
そこで麻衣と大志の意識が途絶えた

どこかの部屋

「まだ全員<覚醒>していないのか？」

「はい、今のところ1人だけです。」

「一人か・・・あとの3人は？」

「後で<影>を送ります」

「何体だ？」

「少なくとも5体は」

「うむ、なら期待しよう」

「麻衣・・・はいい奴だな。ククク」

蝶

――・・・蝶？

真っ暗な場所に淡く青く光る蝶が横切った
身体が勝手に動き蝶についていく

光が、光が見えた

気が付いたら浮いている、体が
急に視界が眩しくなった

――ここは・・・！大志君っ

――っ加藤！どうした？

――えっと蝶を追ってっ

――俺もだ、でもここは何処なんだ？

>俺が呼んだ

急に男の声が聞こえた

>すまないね、驚いただろう

――だれだっ

そこには、どこかの制服を着たくヒト>がいた
顔には蒼い仮面をつけている

>私は周防 達哉、きみ達ペルソナ使いの先輩かな？

――ペルソナ・・・

大志は真っ青になった

――どうしたの？大志君？

――っはああはああ・・・

>君ペルソナ使いに襲われ――

――やめろっ

大志が怒鳴った

――やめてくれ・・・

「大志っ」

「あっお姉ちゃんどうしたの？」

一人の少女が駆け寄ってきた

「逃げてっ」

「えっ」

「逃げて、学校に行ってこれ渡して」

少女がメモ帳を渡した

「えっ、お姉ちゃんは、お姉ちゃんは？」

「いいから行きなさいっ！」

背中を押され走った

学校の道ので

<<ピチャツ>>

と言う音が聞こえ見ると

「なっなんだよ、」

「お前が里中 大志だな」

真っ暗で何も見えなかった

けど、気配で分かった

「悪いが死んでもらう」

悪夢だ、何で

「ペルソナ」

「うっうわあああああああああ、くるなあああああ」

必死に叫んだ

僕から何かが出た

けど

———そこで僕の意識は途絶えた

蝶（後書き）

その頃白い部屋

「和馬、おきた？」

「おきた」

「よかつた」

麻衣と大志は？

「何か気絶した、一様ベットに寝かせといた」

「・・・夢・・・」

「どうした？」

「蝶の夢見た事あるか？」

「え、ええ、何度かそれがどうしたの？」

「・・・いやなんでもない」

「？」

周防 達哉（前書き）

口調変かも？

周防 達哉

>すまない、無理強いはしないけどね

——いえ、取り乱してすいません

——大志君・・・

知らなかった自分が腹が立った恋人なのにこんな事も知らないなんて・・・

>さて、と、ペルソナに目覚めたのは今のところ君たち2人だけだ

——・・・！

——えっ私もそうなんですかつ！？

>まあ、初めて召喚するときは気絶するのが多いからね

——俺も・・・

>俺もそうだった・・・ペルソナを使いこなすには自分と対立しなければいけない

——対、立

>そう、>対立>だ、自分を見失うとペルソナが暴れる

——っ！

——・・・！

2人は愕然としたペルソナが暴れる・・・一体どんなに酷い事になるだろう

その時微かに自分のからだが薄れた

>嗚呼、もうこんな時間がまた話そう

——えっ

——そんなっ

>また合える、早く自分達の世界に戻りな、今度はきみ達の世界で会おう

そして、大志と麻衣は消えた

>><また合う時>は<それ>を外しているのかい？

>ああ、そうだな、<ここでしか>被れないからな、フィレモン

フィレモンと呼ばれた蝶が現れる

> 人に姿にならないのか？

>> ああ、＜あちら＞に行かないとむりだ

> そうか、あの子たちがいる場所は？

金色の蝶が答える

>> 神取のアジトだ一見普通のビルに見える、が、天辺が光っている
> 分かった、さて、舞耶達を呼ぶか・・・

「う、ん？」

目を開けるとベットのの上にいた

「あ、起きた起きた」

「・・・」

大志に和馬が近寄り

「た〜い〜し〜お〜き〜ろ〜」

「うわっ」

<<ゴンツ>>

「いつてえ〜」

遠巻きで麻衣と美久が笑う

「あゝあ、やっちゃった」

「私と同じ、プププ」

大志は痛そうだと
すると

<<カラン>>

「きゃっ、・・・何？」

見ると弓、剣、銃、鞭が落ちていた

＜覚醒＞（前書き）

下手ですけど

お願いします m (—) m

< 覚醒 >

「えっな、何!？」

「武器？」

「戦えって言ってるのか？」

みんなは考え込むそして

「わたしこれ使う」麻衣は弓を持ち上げた、

だが、矢は何処にも無い

「どうやって使うの？」

「ん？わかんない」

「「「・・・」」」

この場にいる人は静まり返った・・・

「た、大志君は？」

「これ」そう言って剣を取った

「私はこれね」美久は銃を取った

「・・・それがよかったのに・・・俺これ」つぶやき、鞭を取った

と同時に

<<ガッシャーン>>

「きゃっ」

< キーン >

「何だあれ!？」

麻衣と大志の目に文字が現れる

【臆病のマーヤ】

・弱点、炎

・耐性、無し

「「何これ」」

< キーン >

「あわわわくつくる!？」

「こっ来ないでー!」

< 汝我名を呼べ！ >

「キクリヒメ！」

< 我は汝、汝は我、我キクリヒメなり >

「っ、アギ！」

< キーキキキキ >

「美久！」

「加藤！まだいる！」

臆病のマーヤは和馬に向かっていく

< 我は汝、汝は我、汝我名を呼べ！ >

「ヨモツシコメ！」

< 我ヨモツシコメなり！ >

「ブフ」

2人は< 覚醒 >した

「・・・何だっただ？」

「・・・」

美久は震えている

「大丈夫？」

「うん、ありがと」

突如

< < ゴンツ > >

「「「「・・・！？」「」「」」

4人の目に文字が映る

【失言のアブルリー】

・弱点、雷

・耐性、無し

【トランスツイイズ】

・弱点、火

・耐性、物理

・無効、氷、雷、風、光、闇

「とつ、トランスツインス炎だけ!？」

「任せて」

美久が前に出る

「・・・ふう、ペルソナツ、キクリヒメ!」

紅い衣をまとった女性が現れた

「アギ!」

トランスツインスズがキクリヒメの炎に巻き込まれ消えていった
すると

「あ、次は俺だな」

大志が出る

「イザナギ」

黒い衣をまとい刀を持って口を隠した男性が出てきた

「・・・」

「ジオンガ!」

「中級魔法・・・」

失言のアブリリーは、落とされた雷によって消えていった。

<<キーヤキーキーキー>>

「なっなにあれ!？」

【ヴィーナスイーグル】

強敵

・弱点、物理

・吸収、火

・無効、風、光、闇

すると、麻衣が

「じゃ、あたしに任せて」

麻衣が弓の弦を引張ったら

「・・・あつ」

光の矢が出てきた

「いくよ・・・やつ」

光の矢がヴィーナスイーグルを貫いた

「何か疲れた」

「私も」

「僕も」

「俺も」

「「「「.....」」」」

「いつになったら出られるのかな」

「あれ？そういえば、私達の荷物は？」

「言われて見ると前にあった段ボールの山が無い

「「「「.....」」」」

「方どこかの研究室

「神取様1997号室全員＜覚醒＞しました。」

「そうか、なら、2003号室は？」

「そちらも全員＜覚醒＞致しました」

「ここの建物全員＜覚醒＞しました」

「なら、始めようか＜Survival＞を」

S u r v i v a l

4人で警戒しながら雑談をしていたその時

<<ウーウーウーウー>>

「なんだっ!？」

その時

<こんにちは、諸君、これから、<Survival>を始める。

いいかね、このルールは外に出たらゲーム開始、人の部屋に入ってもいい、殺しあえ!、頂上を目指してくれたまえ。

ただし、外に出れるのは4人だけだ、>

「えっ4人だけ!?!しかも殺しあう!？」

「つまり、・・・1つの部屋の人だけ!？」

<ルールはそれだけだ、頑張ってくれたまえ>

「どうする？」

「いくしかない」

「・・・うん」

「ああ・・・」

「行こう」

とその時

<バン>

部屋のドアが壊された

『まずはお前達からだ!』

一人の男性が入ってきた

「なっ」

「戦闘態勢!」

「」「」「」

『ペルソナアアアアア、アークエンジェル、ブレイブザッパー』

赤い武装した天使が剣を振るう

「ここに!イザナミ!テトラカーン!」

4人のからだに銀色の光がつく

『なに！？』

アークエンジェルの攻撃は跳ね返された！

『ぐあ』

「おい、何でお前一人なんだ？」

大志が言う

『・・・した』

「えっ」

『殺したんだよ、勝手に動かれるのいやだからな！』

「・・・さない」

「麻衣？」

「・・・るさない」

『くはははは、いい気分だったよ、ペルソナに殺させるのはなあ』

「お前・・・何の罪も無い人を殺したの？」

『ああ、邪魔だからな、悪いか？』

「・・・下す」

『ああ？』

「お前に裁きを下す！」

麻衣は叫んだ

『やってみるや、できるもん・・・』

既に麻衣は男に詰め寄っていた

「なっ」

「麻衣っ」

「やめろっ加藤！」

だが既に男は死んでいた・・・

「あっ」

麻衣は一瞬気を失っていた我にかえると目の前には血まみれの男がいた

「・・・だ」

「加藤っ」

「麻衣！」

「おいっ」

「いやああああああああああああああああ！」

「加藤！落ち着けっ加藤！」

「ころ、し、ちゃった・・・」

「ここは危ない洗面所に行こう、和馬、美久！見張つてろ」
「分かった」

「・・・はあはあ」

「落ち着いたか？」

「うん」

「これからもつと殺すことになる」

「いく」

「いいのか？」

「うん」

「じゃあ行こう」

「いくのか？」

「ああ」

「いくか・・・」

そして麻衣たちは部屋の外に出た

合体魔法（前書き）

そろそろ人物紹介しヨーかなー？

合体魔法

「はっはっはっはっ」

私達は走る、血だらけの廊下を・・・

「何処まで行っても死体だらけ・・・うっぷ」

「大丈夫？」

「ああ・・・」

「麻衣反応は？」

美久が聞く

「無い、階段は・・・真っ直ぐ、行け、ば、いい」

「じゃあいくか」

●●●●●

「麻衣反応は？」

「4人ある」

麻衣が集中してから答えた

「どこだっ」

「そこの角を曲がって・・・部屋の中だ！」

「・・・階段上るにはこの人を・・・」

「一度階段まで行ってみようよ」

麻衣が提案し、人がいる部屋を避けて階段に行った

「・・・駄目か」

次で最上階ここに入るには4人だけ・・・

「いやだよ・・・」

ここまで何もしないで来れたのは他の人たちに任せていたからだ・・・

・

「・・・」

「ノックしてか・・・」

美久が言いかけたとき

「あっ！」

「どうした!？」

大志が言うと

「人が・・・1人に・・・」

「「「えっ」「」」

「仲間割れ？」

「違うこの感じ・・・っペルソナが暴走して、・・・食べてる・・・
たべてるよ」

「<食べる>？」

和馬が言うと麻衣が震えながらうなずいた

「もう、人じゃない、影、シャドウになってる・・・」

「助けるには倒すしかない・・・か」

とその時

<<ガッシャーン>>

「なに!？」

「・・・戦闘態勢!戦うよ・・・」

麻衣が叫び戦いに突入した

●●●●●●●●●●

【死神首狩】

強敵

・無効、光、闇

【嘘言のアブルリー】

・弱点、雷

・耐性、火

・無効、物理

【エターナルイーグル】

・弱点、闇

・吸収、雷、風

・反射、光

【血のヘカントケイル】

・弱点、闇

「多っ！」

「いくよ！」

美久は後方支援、和馬、麻衣、大志は前線

「来て！イザナミ！メギドラオン」

「来い！イザナギ！メギドラオン」

「ミックススライド！」

2人は同時に召喚し、同時に技を発した

「メギドラダイーン！」

<<ドカーン>>

「やったか？」

「まだ！」

『来るな、逃げろ！』

「なんだ！？」

「ペルソナにのつとられて制御が効かなくなってるんだ」

「あつ敵が」

死神首狩が新たな敵を召喚する

【白のジジル】

不明

【アケロンサーチャー】

不明

【淫欲の蛇】

不明

【永遠の砂時計】

不明

「まずいアナライズが効かない！」

【狂乱のマリア】

【キングキャッスル】

【グランドマグス】

【洗礼の砲座】

【ディバインマザー】

【天神の武者】

【無の巨人】

【混沌のキュクロプス】

「どうする？・・・加藤？」

「カードが落ちてる」

「ほんとだ」

拾うとアナライズが起動する

【ノルン】

・無効、火、氷、雷、光、闇

・吸収、風

・弱点、物理

「ペルソナ？」

「みたいだな」

カードは消え、自分の中に入った感じがした
「できる」

「キクリヒメ、アギダイン！」

「サトゥルス、マハラギダイン！」

「ノルン、マハガルダイン！」

「シヴァ、ジオダイン！」

「合体魔法！」

「紅き雷！」

紅い雷が敵全体を包んだ

「すげー」

だが首狩はびくともしない

「どうする？」

みんなは疲れきっているこれ以上ペルソナを出すと動けなくなる可能性がある

「はぁはぁ、っ、私が、やる」

「加藤！？」

大志、何か言おうとしたが麻衣が黙らせる

「大志君手伝って！」

「っ、分かった」

「ペルソナチェンジ、イザナミ」

「・・・チェンジ、イザナギ」

「「ミックススライド！」」

「「神の判決！」」

イザナギとイザナミが首狩に手を翳した。

すると四方八方から首狩に向かって剣が伸び斬りつけた

<我らが下した判決は<死>なり身を持って後悔するがいい首狩！>

イザナミとイザナギが言い消えていった

そのとき

<<ガッシャーン>>

神取

<<ガッシャーン>>

「なに!？」

「新手か？」

「違う!最上階への扉が壊された音!」

「……」

「いく？」

「……うん」

「本当だ壊れてる麻衣気配は？」

「無い、でも、上に誰か居る」

「……えっ」

「態勢整えてからの方が良いと思う」

「そうだな、そうだ、何処かにまたカードがあるかもしれない」

「武器とかな」

「じゃっ探そー」

「気をつけるよ」

「……わかった」

↳加藤&大志ルート

麻衣(以下ま)「武器、武器どこかな」

大志(以下た)「加藤落ち着け」

ま「あつた」(たたたた)「あつたよ」

た「……聞いてねーし」

ま「はやく」

た「はいはい、今行く」

ま「すごい、性能高いじゃん」

た「カード見つけ」

ま「なぬ!？」

た「俺のな」

ま「(´・ω・｀)しょぼん」

た「また見つければいいじゃんか」

ま「何のペルソナ？」

た「使う時に見せる」

ま「(´・ω・｀)しゅん」

た「・・・」

ま「次いこ」

た「ああ」

ま「2枚カード見つけ」

た「どっちかハズレ・・・」

ま「ああー!」

た「っ!何だよどうした？」

ま「タナトスのカード!」

た「なにっ!」

ま「(^。^)」

た「もうひとつは？」

ま「ヤクシニーのカード」

た「・・・」

「大体集まったな」

「うん」

「そろそろ行く？」

「行こう」

最上階

「やあ、＜新型＞は君達だね。」

黒いサングラスをかけた男性が居た

「誰だ！？」

大志が不意に叫ぶ

「私の名前は神取」

「……！？」

「神取は何年か前に死んだはずだっ！」

神取は答える

「そう、私は殺された、ある青年にね」

『そうだ、俺が殺したはずなんだ！』

「この声！」

続く……

神取（後書き）

これ完璧にオリジナルです。

本編では神取・・・死んだっけ？・・・

てな感じだったんで勝手に死なせました（殴
一様1〜4まで入れようと思います^^

シンクロ(前書き)

あ
あ

シンクロ

「来たね”特異点”の少年よ」

神取は振り向かずと言った

そこに淡く蒼い仮面を被り制服を着た人が居た

『神取鷹久・・・なぜここにいる・・・』

「この研究員が望んだからだ」

神取は未だに振り向かずに関自分と大志を見ている（ように見える）

『・・・か』

大志は”またか”と仮面の男が呟いた声が聞こえた

（どういうことだ？）

『・・・その子たちをどうするつもりだ？』

仮面の男が言った

「・・・最後の試練を与えるだけだよ」

「「「「！？」」」」

『なんだ！何をする気だ！』

「ただ単にシャドウと戦わせるだけだよ」

『・・・』

さて、と言い神取は研究員らしき人に何かを言った

「”特異点”の少年はそこで見ているがいい」

仮面の男は前に進もうとしているがなぜか進まない

『なにっ』

「君はまだ”完全には戻っていない存在”だからね結界を張らせてもらった」

『くそっ』

だが仮面の男はふんつと鼻で笑った

『俺だけなのか？』

「ああそうさ君”だけが”入れないようにしておいた」

『・・・舞耶！』

「なにっ」

<<バンバンツ>>

銃声が響きその一発が神取の左肩に当り神取は呻いた
そこに拳銃を持った女性に金髪で仮面の男と同じ制服を着た女の人、
真つ青の髪と制服をきた3人が目の前に居た

「くそ、油断していたな・・・」

研究員らしき人が近づき耳打ちした

「すぐに始める、ここの鼠どもを一匹残らず始末しろ!」

神取が指示した後急に神取や研究員らしき人が消えた

「!？」

すると今までに見たことが無いシャドウがあっちこちから湧いて
きた

「なんだっ!？」

「落ち着いて、今彼らに攻撃しても当たらないからね」

大人びた女の人声が掛けた

「どついう意味です？」

「同調するのよ、いわゆる、シンクロ」

「どつやって？」

大志が困惑した顔で訊いた

「集中しなさいそしたらペルソナが教えてくれるから、あ、私、天

野舞耶ヨロシクね」

あ、と麻衣が呟いた

「どうした？」

大志が聞くと

「できるよ、・・・」

「!？」

「シンクロ!」

すると麻衣の体が光に包まれ消えた時はイザナミが持っていた弓を
持っていた。

「・・・俺もやってみるか」

皆はシンクロした、

「何か凄い！」

「来るわよ！」

すると、体が軽くなり力が込み上げて来た。

戦闘 1 / 1 (前書き)

やっと戦闘シーンかけましたー^^

戦闘 1 / 1

麻衣と美久と舞耶の前に逆回りの時計が現れた

【reverse clock】

・弱点、雷、光

・耐性、風

・無効、火

・吸収、氷

HP 1000

SP 900

「いづくよー」

麻衣が弓を構えると光る矢に雷を纏っている矢が現れた

「せーのっ」

矢を放つと突き刺さり内側から光が見えた刹那爆音とともに消え去った

「あいつ、自爆しやがった」

「大志っ後ろ！」

大志の後ろに血まみれの大きい人形が大釜を大志に向けて振り下ろした

——もう逃げられない

「ペルソナチェンジ！シヴァ！テトラカーン！」

ぎりぎりで透明のドームがかかり大釜の攻撃は血まみれの人形に跳ね返った

<<ギーーーーーアアアアア>>

「うるさっ！」

みんなして耳をふさぐ

「うざっ」

美久が前に出る

「ペルソナチエンジ！オベロン！シンクロ！真の雷！」

黄色い塊りが人形の上に現れたそして・・・

爆発音とともに消え去った

「また自爆か・・・」

「あれ？」

「どうした？」

「あんなにいつぱいいたシャドウが居ない」

麻衣の言う通りさつきまで居たシャドウが居ない

「なぜ？・・・！達哉！？」

舞耶が声を張り上げた

『ああ、何とか間に合った』

仮面の男は疲れきった声で言った

「ペルソナの力で？」

和馬は問い返した

『ああ、俺のペルソナの力で2つのシャドウを自爆させた、』

「自爆って・・・ダメージの事は考えなかったのか！？」

和馬が言うと

『・・・現に皆はダメージを追っていないだろ』

「す、すいません」

『・・・まずはここを出よう、話はそれからだ』

戦闘 1 / 1 (後書き)

おわるの早っ！？て思った人ごめんなさい

交わりの世界〜1〜（前書き）

なんかサブタイトルバラバラ・・・

交わりの世界〜1〜

舞耶に連れられて舞耶の部屋に連れて来られた

「あ、あのこんな服で良いですか？」

ええ、と舞耶は言い、続けて

「あんな格好でうるちよろしてたら怪しまれるでしょ」

う〜んと言いながら部屋を見回す・・・やたら散らかっている

「・・・結構散らかってますね・・・」

「あははは〜最近会社にいるようになったから片付けられなくて、それより、似合ってるわよ〜その服」

麻衣はフリフリの赤いミニスカートに赤い（袖にフリフリがついた）Ｔシャツ、美久はその青の色違い

和馬はぶかぶか（？）のジーンズに白いＴシャツ

大志はきつちりとしたジーンズ（キツイが）にパーカーを腰に巻き黒の縦ラインが入った白にＴシャツを着ていた。

「じゃっそこら辺に座って」

（（（（そこら辺？）））））

いろいろ散らかっている場所で（紙やらCDやら）どこに座るにだらう？

舞耶から話を聞いた

——まとめると〜

・ここは交わりの世界で〜この地区から出たら違う世界に行ってしまう

・私達が使っている力はペルソナ心の鎧

・仮面の男は周防達哉、神取に無意識の世界に送り込まれ元の世界にもどってくるが完全には力が戻っていない

・他にもペルソナ使いがいる

・金髪の学生はリサ・シルバーマン青い学生は三科栄吉、前に共に

戦っていたと言う

・ここは私達がいた世界ではない
・そして私だけ詩を歌うことによってさまざまな効果を発動できる能力がある

——こんな感じ、かな？

「ま、教えて良いのはこれだけよ、その他は後々話すわじゃ」
そう言つて外へのドアノブに手をかけ

「貴方達的能力を確かめたいから神社に行くからついて来て

くアラヤ神社く

「ここに入つて」

舞耶が戸をあけた

交わりの世界へ2 (前書き)

さっそく何が何だか分からなくなってきた・・・

交わりの世界〜2〜

「やあ」

その先にあつたのは無限に広がる宇宙（？）みたいなものが広がっていた、そしてそこに周防達也がいる

「少しは落ち着いたかい？」

その問いに大志が答える。

「僕は一樣・・・いえ、まだ混乱してます」

「そうか・・・それは仕方ないだろういきなりだからな」

「・・・」

麻衣がちよろちよろあたりを見回している

「「「「・・・聞いてる？（；――）」」「」」」

「ええっ！？・・・ごめん・・・」

「ここは・・・俺が作った場所だ・・・他のところにも行ける」
和馬がおどおどときく

「ここでシャドウは出ないんですか？」

達也が即答する

「出ない」

「・・・」

「さて、本題に入ろう」

達也が後ろを向き

「君たちにお願ひがある。・・・それは

この世界を救つてほしい」

大志達は固まった

「ここつて！？」

そこは自分たちが通っていた学校だった。

「なんで！？」

「ほかにも行ける、今回はここで訓練をする」

「『『『ええっ!?!?!』』』」

あつと麻衣が声をだす

「あのっ私たちの世界と関係があるんですか？」

あと私たちは学校も・・・」

「それは大丈夫だ君たちがここに居る間あちら側は時間が止まってる」

「よかつたあゝ」

美久が言つた

～学校舎内～

「まるまるそっくりだな」

あれつと麻衣が声を出した

「達也さんがいないよ」

周りを見てみると舞耶と自分たちしかない

「・・・」

「どうしたの？」

「おかしいと思わないか？」

「へ？」

すると

「危ない!」

<<どっん>>

麻衣を抱きながら大志は伏せていた

「なにいまの!?!」

「シャ・・・ド・・・ウ？」

そこには赤く短髪の男(?) その手には燃え盛る炎の剣を持って、
体は炎に包まれていた

【スルト】A (魔術師)

HP2000

TP500

弱、氷、風

耐、×

無、炎、光、闇

Weak POINT、頭、腰の一点

「何これ!？」

美久が悲鳴じみた声をあげた

『ちよつと君たちを調べさせてもらっ』

脳裏に響く声がした

「私は？」

『舞耶姉は・・・攻撃はしないでくれ』

「わかつたわ」

「何が何だか・・・」

「来るっ！」

<オオオオオオオオオオオオオオオオ!>

「・・・!大志くんっ!・・・ねえっねえってばねっえっ」

麻衣は大志の体を揺するが返事が来ない

「加藤っ危ないっ！」

<逃ガサナイ!>

スルトは大きく剣を高く上げて振り落す

「キヤアアアア！」

すると、炎は校舎内に燃え広がり麻衣たちをかこんだ

「・・・!」

「うつ・・・」

「大志君！」

「?・・・!?!?」

大志は吃驚した、真上にはスルトがいたのだ

「加藤あぶなっ——」

「ハアアアアアア！」

「・・・いつけえええー」

麻衣たちの頭上にいたスルトは麻衣が出したペルソナ『タナトス』に攻撃をキャンセルさせた

「これ、あの時の」

「はあはあ」

大丈夫か？と大志が言うと

「うん、このペルソナは使うにはまだ早かったみたい、自分より強すぎるとシンクロできないみたい」

「そうか・・・」

『安心してゐる暇はないぞここからは自分たちでここを回って敵と戦ってもらう、攻撃をされたら痛い死にはしない、気絶はするけどな』

「・・・」

「いこうよ、このまま固まってたって始まらないよ」

麻衣が立ちながら言った

「・・・そうだな・・・」

「でさ・・・私たちどうなっちゃうんだろうね」

「分からないけど・・・このままあの人を信じていいと思う」

交わりの世界くく

誰も信じたくなかった。

裏切られることが怖かった。

けど。

大志が人を信じることで元気になること、笑いあえることを教えてくれた。

そして。

僕に唯一の温もりを与えてくれた――

く雪の女王く

構造が複雑になってしまった学校を敵をなぎ倒しながら屋上まで上がってきた。

その景色は上下左右氷だらけ、中央には何やら黒い物体が居た

“それ”に目を向けるとアナライズが発動する

【雪の女王】

弱・火

耐・風

無・氷・光・闇

weak point・仮面

「え、仮面なんてないよ??」

美久が呟く

確かに物体は黒い縦長で仮面のような物はない

「……!みろっ!あそこを!!」

大志が指を指した“それ”の真ん中が白くなり真っ白な仮面が出てきた。

『現実のここの学校は雪の女王に支配されている状態だ、学校を助けないならこいつを倒せ』
脳裏に達也の声が響いた

形を変えた雪の女王は麻衣の姿そのものだった、唯一違うのは目の色が深い紫色から血のような赤い目になっていることだった。
> 貴女は一人になりたくて何もかも消し去りたいんでしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0133q/>

persona ~ return ~

2011年5月12日02時17分発行